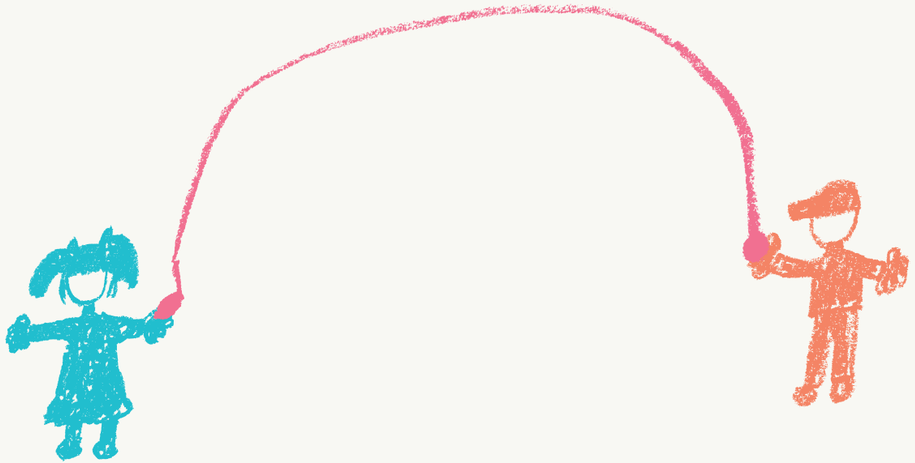
Societal Design Fiction
Family Friendly Japan 2040

社会のデザイン・フィクション／家族にやさしい2040年の日本

Redesign
of Society
Vol. 5



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

Aalto University
School of Arts, Design
and Architecture

アールト大学連携
国際共同PBL教育事業
社会のリデザイン

Aalto ARTS Media Lab
九州大学大学院 芸術工学研究院
ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター（QREC）
文部科学省 次世代アントレプレナー育成事業

Contents

03／背景と目的 Redesign of Society

04／Introduction

カリ・ハンス・コッモネン Kari-Hans Kommonen

山田 裕美 Hiromi Yamada

平井 康之 Yasuyuki Hirai

08／ダイアグラム・キーワード Project Diagram, Keyword

09／スケジュール Schedule

10／フィンランドでのフィールドリサーチ Research in Finland

11／プロジェクトの流れ Flow

13／Team Project

提案 1 Team Avoiding Relationship 「Reform of Education System」

提案 2 Team Difficulty of Finding Childcare 「Tentopia」

提案 3 Team Father's Role 「Gossip Girls and Boy」

提案 4 Team Work and Small Children 「AS THEY WISH」

提案 5 Team Maternity Ecosystem 「Internship Supported by Government」

29／フィンランドでの交流 Interaction in Finland

Redesign of Society

背景と目的

2040年の日本は
どのようになっているのでしょうか？

今から約25年後…、私たちはちょうど親の世代となり、こどもたちが私たちの世代となります。日本はもうすぐ、かつてどの国も経験したことのない少子高齢社会を迎えます。現在おこっている問題を直視せず、流れにただ流されていけば、その先には最悪の社会（Dystopia/ディストピア）が生まれているかもしれません。それをリデザイン（Redesign）し、望むべき理想の社会（Utopia/ユートピア）にするために、私たちは今、何をすべきなのでしょうか。
アールト大学メディア・ラボと九州大学が連携したこの授業は、今回で5年目を迎えました。九州大学では、グローバル・デザイン・プロジェクト（芸術工学研究院）/グローバル・PBL・プログラム（ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター）として6月から開講されました。多様な学科から学生が集まりチームでプロジェクトに取り組むこと、またアールト大学の教員や学生とディスカッションや交流をすることで、社会に対する深い洞察力や国際感覚を持つソーシャルアントレプレナーを養成することを目的としています。一昨年度からプロジェクト全体のテーマを、「社会のデザイン・フィクション：家族にやさしい2040年の日本」とし、少子高齢社会を解決する、あるべき未来の社会のデザインについて考えました。そのため学生たちは、広く複雑に絡みあった社会課題の中からテーマを絞り、デザイン・フィクションというデザイン手法を使って、提案をつくりました。その過程の日本とフィンランドで、今まさに課題に直面している人たちからフィードバックを受けることで、提案を磨いていきました。フィンランドでの一週間のフィールドワークを経て、最終プレゼンテーションは、九州大学で行いました。

Introduction 1

教員紹介：カリ・ハンス・コッモネン

元アールト大学 メディアラボ
Arkiリサーチグループ ディレクター

Kari-Hans Kommonen
former Director of Arki research group
Media Lab, Aalto ARTS

九州大学での「社会のリデザイン: Redesign of Society」は今回で5回目になります。テーマは引き続き「2040年の家族にやさしい日本の未来:Family Friendly Japan 2040」です。
これまでは、冬の授業でしたが、今回は初めて暖かい時期に開講できました。また、一週間コースの授業として参加したアールト大学学生と、九州大学学生の合同チームを結成することができました。さらに、新たなスケジュール構成として、フィンランドでの滞在期間を、一週間に延長し、最終発表も帰国後日本で行うようにしました。つまり従来よりも多くの体験と情報を得ることができ、フィンランドと日本の比較分析を行う視点を共有することができました。
アールト大学学生にとって、日本の状況を即座に理解するのは大変難しかったようですが、本授業への新たな視点や、価値提供を行ってくれました。二つの大学のグループがさらに良い密接な関係になるように、物理的な時間や距離をともに解決していきたいと思います。
今回、幸運にも、フィンランドで多くの素晴らしい訪問先や、アールト大学での講義をいただくことができました。ヴィルマ・レジスとアイノ・フリアス、水谷理人（UX Design Lead, Siili Solutions）、メルビン・バサネン、ミンナ・エヴァソラ、マシアス・コモネン、ハンナ・タロラ、ヨハンナ・ラミータスクラ、小山友介（芝浦工業大学システム理工学部教授）、その他ご協力いただいた方々に感謝いたします（敬称略）。最後になりましたが、平井教授と山田特任助教をはじめとする九州大学の芸術工学研究院とQRECのみなさん、アールト大学側で授業をまとめていただいたフィリップ・ディーン教授、そして情熱を持って参加し良い成果を生み出した学生の皆さんに感謝したいと思います。

Introduction 2

教員紹介：山田 裕美

九州大学ロバート・ファン／
アントレプレナーシップ・センター（QREC）特任助教

Hiromi Yamada

本授業は、科目名：Global PBL Program / Global Design Projectとして、九州大学ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター（QREC）と芸術工学研究院が共同し、フィンランドのアールト大学メディアラボ、デザインフィクションの手法を提唱するKari-Hans Kommonen氏、協力の下、実施している国際連携授業で、本年度で5年を迎えます。昨年度から、現地フィンランドでの研修期間を長く設け、滞在中は、現地の公共サービスである妊娠・出産・子育ての切れ目ないサポートを行うネウボラの取り組みや現地の公共サービス、民間で自身の課題を解決している施設の訪問や現地で暮らす方々との意見交換を行いました。また、これまで2月に行っていた現地研修を9月に行ったことで、現地アールト大学の新学期の雰囲気の経験や現地の学生とグループワークは、より深い理解を得ることができたと思います。新しいコンセプトや現状を知り、日本との違いを目で見て感じることで、新しい視点で課題解決の方法を見出したアイデアやプランの最終発表は、各チームが魅力的なアイデアやプランを発表し、大変有意義なものになりました。毎年、新しいエッセンスを取り入れ発展していく取組となっており、日本では、福津市の方々にも手厚いご協力をいただきました。本授業は、40年後の未来を考えることから望ましい社会を実現するためのビジネスモデルを提案するというビジネスを考える上では、新しい視点や異なるアプローチからビジネスデザインの作成プロセスを体験できる授業であると感じています。また、新しい課題やこれまでの課題を発見し、それを解決するプロセスを自身で考え乗り越えていく経験は、アントレプレナーシップマインドの醸成にも結びつくものです。ご協力頂いている皆様へ感謝とともに、引き続き、九州大学の全学部・全学府の学生が受講できる機会を提供していきます。

Introduction 3

教員紹介：平井 康之

九州大学 大学院 芸術工学研究院
デザインストラテジー部門 教授

Yasuyuki Hirai

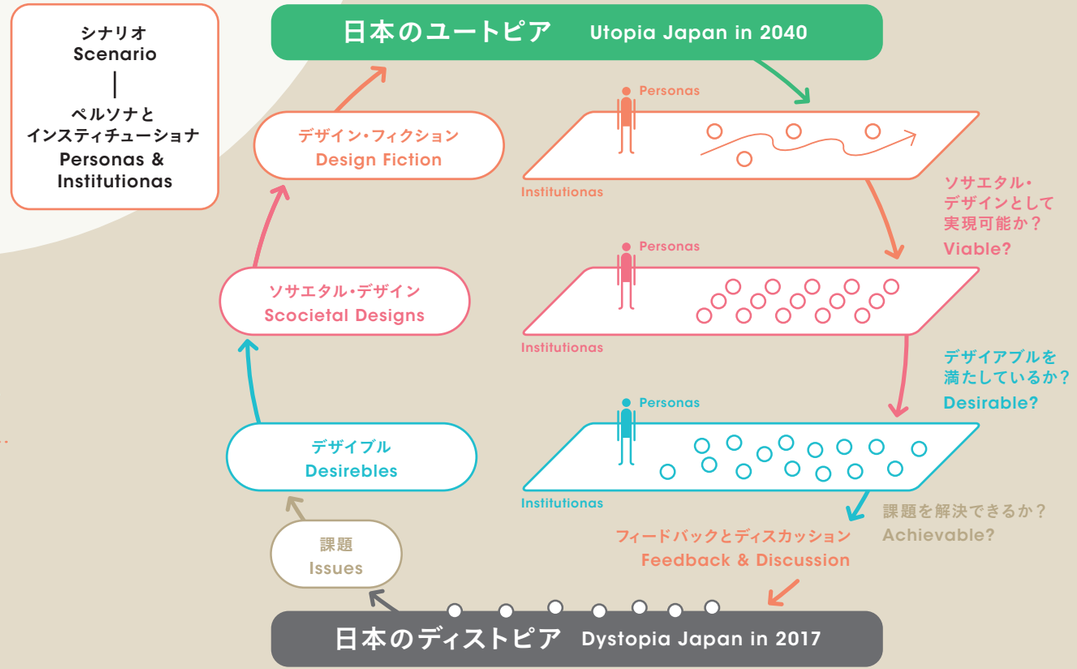
Professor, Depertment of Design Strategy,
Graduate School of Design,
Kyushu University

本授業は、文部科学省の「次世代アントレプレナー育成事業」の助成を受け受け開催しています。その目的は、ソーシャルエコシステムの構築であり、人材育成としてソーシャルアントレプレナーを養成することです。本授業を始めた5年前は、北欧型デザインのプロセスや社会テーマの設定など、初めての取り組みに戸惑うこともありました。手探りで進めていきましたが、ディスカッションを通じて徐々に形になり、今年度はやっとプログラムが一つの社会的デザインへのアプローチとしてまとまったと感じました。また社会的にも、デザイン思考やソーシャルイノベーションの社会的認知が高まり、本授業のような高次の政策デザインも周りから理解されやすくなって来たと思います。また、今年の特徴として、社会連携が進んだことがあげられます。今年から福津市のサポートを受け、実際の行政側の子育て支援から、課題へのインスピレーションを受けることができたことは、大きな収穫でした。ソーシャルアントレプレナーは、社会的課題に自律的に取り組み、事業化などの社会実装に結びつけることができる人材を意味しています。それは、企業に勤めていても、自営でも、仕事を持たない場合でも、取り組みが可能な活動であり、社会の仕組みを変えるモノから社会システムまで幅広い解決策を創造する活動です。どうすれば学生がそのような活動に向けて授業終了後も自律性や持続性を維持することができるか、は授業提供側の今後の課題です。社会実装に向けて本授業をさらにレベルアップしていきたいと考えています。
最後に、副市長の松田美幸様、健康福祉部子ども課の榊課長様、スタッフのみなさまにお礼申し上げます。またアールト大学でも正式の授業として開講され、５人のアールト大学の学生が参加しました。メディア学科長のPhilip Dean教授に感謝を述べたいと思います。

Photo：川本聖哉

Theme:Family Friendly Japan 2040

テーマ：家族にやさしい2040年の日本



Project Diagram, Keywords

ダイアグラム・キーワード

社会のリデザイン

社会のデザインとは、経済や技術の進歩、もしくは気候変動、少子高齢化などの様々な課題に伴い変化する社会システム全体を指します。社会は常に変化し、良い変化もあれば悪い変化もあります。その変化は良い方にも悪い方にも向かい得ます。社会のリデザインは、人々が最も望ましいと思うことを考慮し、社会のデザインに変化を起こそうとする意図的な取組みです。

課題

課題とは、社会の中で私たちが心配に思う懸念事を指し、我々が本研究を通じて明らかにしたいと思う対象を指します。

デザイアブル

デザイアブルは、未来の社会が持つべき特質と定義します。デザイアブルによって、リデザインすべき対象を明らかにし、目指す内容や計画についてステークスホルダーからの評価を得やすくすることができます。

ソサエタル・デザイン

ソサエタル・デザインは、社会を形成する多様な仕組み、団体、運動、組織などのデザインです。デザインの過程で、社会の事象を学び、課題に対してどのようなソサエタル・デザインを提案することで、ユートピアに必要なデザイアブルを実現します。

ディストピア

様々な課題や懸念が実現化した最悪シナリオにもとづいた未来社会。

ユートピア

発見した課題が解決され、デザイアブルが表す特質が実現された、私たちが望む理想社会。

デザイン・フィクション

何人かの登場人物を設定し、ストーリーとスケッチを用いてシナリオで表現するデザイン手法。データによる抽象的な未来予測（Tendecy）を身近で具体的なこととして共感（Empathy）するために活用されます。創作したシナリオを分析することで、課題や解決策の発見につなげます。

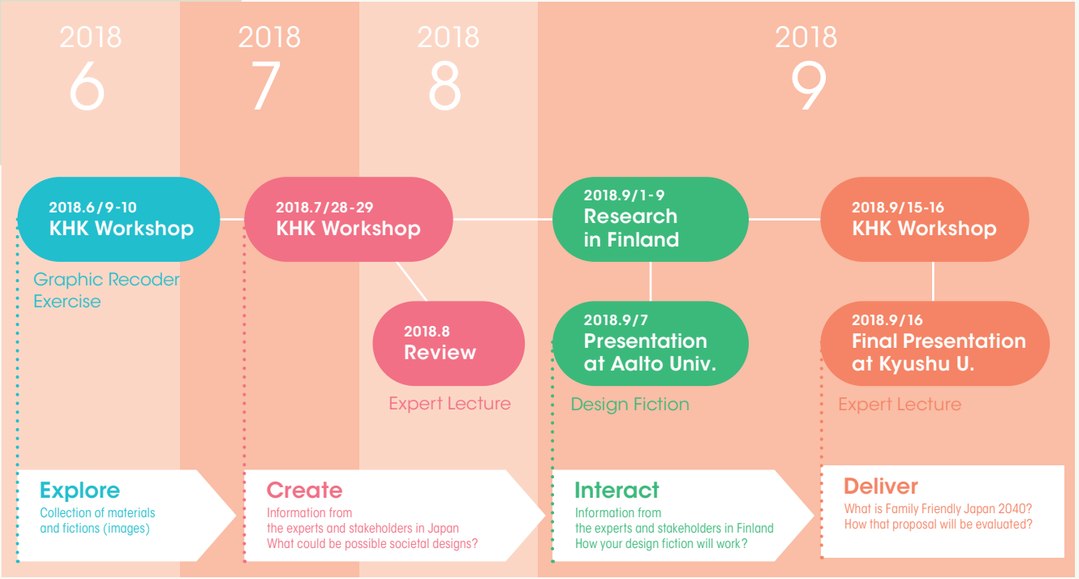
ペルソナとインスティチューショナ

デザイン・フィクションでは、未来社会のステークスホルダーとして重要な人や機関を、ペルソナ（人）やインスティチューショナ（機関）として設定します。それらの活用によって仮定ではあるが、納得しやすい相互の関係性を明らかにすることができます。

Schedule

スケジュール

授業は6月9日をかわきりに、下図のようなスケジュールで行われました。プロジェクトの過程で生じた資料は、ウィキを使って全員で共有し、適宜コッモネン先生によりチームの個別指導も行われました。



※カリ・ハンス・コッモネン先生…KHK

Research in Finland

フィンランドでのフィールドリサーチ

デイケアセンター 訪問
Silkkiniitty Day Care Centre

ブラジル人フィンランド人の夫妻 インタビュー
Interview: Vilma, Régis and Eino Frias

ネウボラ 訪問
Minna Eväsoja, Tapiola Neuvola

フィンランド在住日本人父親 3名 インタビュー
Interview: 3 Japanese Fathers

デザイナー 水谷理人氏 レクチャー
Lecture: Michihito Mizutani
Siili Solutions

図書館 訪問
Iso Omena Library

小学校 訪問
Toppelund Primary School

芝浦工業大学 小山教授 レクチャー
Lecture: Yuhsuke Koyama
Shibaura Institute of Technology

国立健康福祉センター
Lammi-Taskula氏 レクチャー
Lecture: Johanna Lammi-Taskula THL

Flow

プロジェクトの流れ

プロジェクトのテーマと進め方の説明、学生の受講動機と自己紹介、質疑応答を行った。

Tokyo Graphic Recorder
清水 淳子 氏

Viktoriya Korshunova
MA in New Media, Sound in New Media

Tito Williams II
MA in Collaborative and Industrial Design

Ting-Jhen Yang
MA in Collaborative and Industrial Design

Apichaya Sindhuprama
MSc in Creative Sustainability, Real Estate

Antton Nuotio
MA in New Media, New Media Design and Production

Philip Dean 教授
Aalto ARTS, Department of Media, Media Lab

課題：少子化、晩婚化に関する記事や情報を収集する

課題：チームで考えたデザイン・フィクションを専門家や関係者にインタビューして、フィードバックを得る

課題：次回までにそれぞれのテーマについて

課題：最終プレゼンテーション用の資料完成

2018.6/9-10 KHK Workshop

- カリ・ハンス・コッモネン先生のワークショップ初日
- 授業概要の説明、プロジェクトのテーマと進め方の説明、自己紹介
- チームを組んで2040年のユートピアに関するデザイン・フィクションについて考え、発表。
- 各チームのデザイン・フィクションの発表
- 関心のあるテーマを選んで、最終プレゼンに向けたチーム分け
- チーム名とテーマの決定

2018.7/28-29 KHK Workshop

- 各チームごとに現状調査、インタビューした課題の発表、ディスカッション
- 清水淳子氏によるグラフィックレコーディングの講義・演習
- KHK講義：デザイアブル、ソサエタル・デザインなどキーフレーズについて
- 提案内容について，エコシステムの作成
- デザイン・フィクション演習：2040年の未来についてストーリーを考えビデオを用いて発表

2018.8 Review

- 進捗状況のチェック、ディスカッション
- 各チームスカイプなどでビデオなどの進捗状況を報告、
- 最終プレゼンテーションに向けての説明
- 渡航についての最終確認

アールト大学プロジェクト

2018.9/1-9 Research in Finland

- 図書館、ネウボラ、など4カ所の施設見学

2018.9/7 Presentation at Aalto Univ.

- 2040年のデザインフィクションの提案
- アールト大学にてプレゼンテーション、ビデオの発表、ディスカッション
- 問題の原因について分析

2018.9/15-16 KHK Workshop

- 2040年のデザインフィクションを再構築
- 九州大学にて、提案の最終プレゼンテーション、ビデオの発表、ディスカッション

※カリ・ハンス・コッモネン先生…KHK

2018.9/16 Final Presentation at Kyushu U.

提案

Team Avoiding Relationship

1 Reform of Education System

課題

私たちのチームは、「結婚を含め、心地よい人間関係を築くことができない」ことを課題と捉えました。今回のプログラム全体の内容が家族に重きを置いているので、私たちのチームは、その家族の形成前に注目し、結婚に至るまでの関係の回避を意味する「Avoiding Relationship」をチームのテーマとしました。範囲も決まり、なぜ結婚しないのかということを調べるうちに、結婚しない人ではなく相手がいないという理由で結婚したくてもできない人が多いということがわかりました。ではなぜ相手がいないのか。私たちは収入や地位などの前提条件が課題だと考えました。つまり、この前提条件すなわち「こうでなければいけない」という固定概念が結婚の邪魔をしています。逆に言えば、固定概念を払拭することができれば、結婚だけでなくそれ以外の人間関係も上手くいくはずと考えました。

デザイアブル

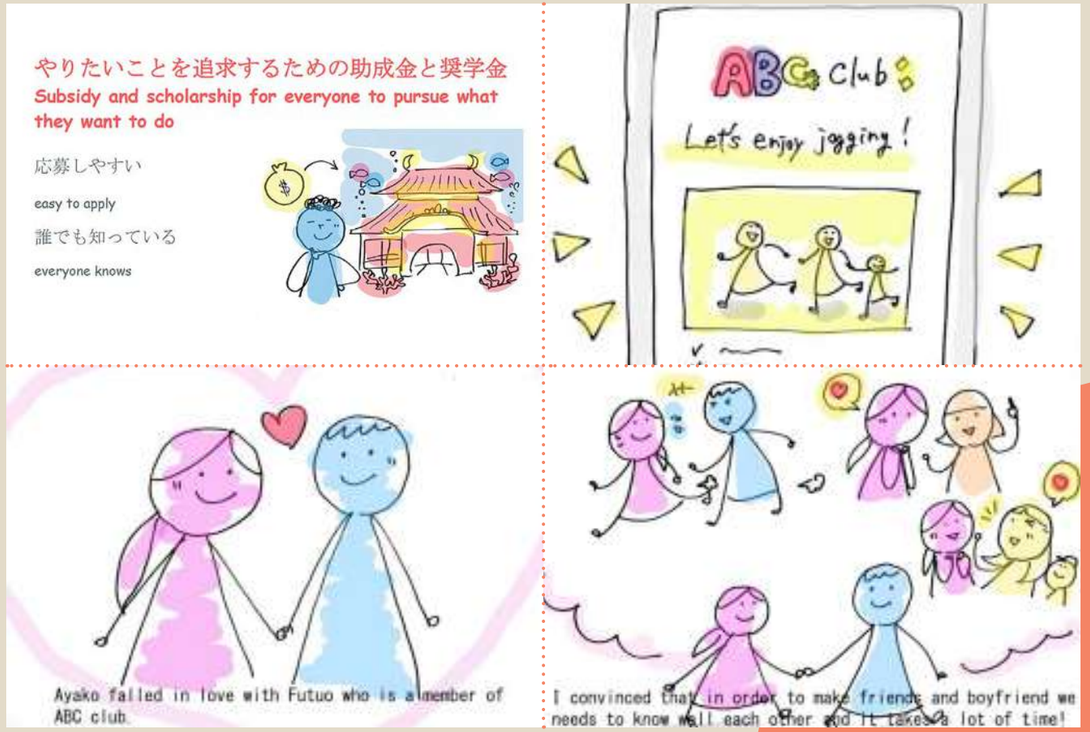
私たちが望む社会は「人々の魅力溢れる社会」です。そこには、多様な情報を得て、やりたいことを見つけ、挑戦する環境があります。挑戦することを批判する人は誰もいません。他の人に受け入れられることで自信を持ち、魅力を発信できます。これらのプロセスを経て、人々が深い関係を築いていくことが望まれます。

ソサエタル・デザイン

デザイアブルを実現するソサエタルデザインとして、以下を提案します。家庭環境によって子供の未来が左右されないために、学校教育を無償化すること、知識教育に加え経験と思考力を養うことに特化した学びを取り入れること、それを大人が時間をかけてケアできるよう、先生の数に余裕を持たせること。また、個人の夢や夢を追いながらも子育てをしたいという願いを叶えるための支援金を政府が負担すること。政府がダイバーシティ週間を設定し、多様なバックグラウンドの人々が参加し表現されるイベントやドラマを促すこと。これらが互いを認め合う気持ちを養い、良い人間関係を築くことに繋がると考えました。

日本のユートピア2040

私たちが考えた日本のユートピア2040は、支援金による教育改革やイベントなどによって多様性を知る機会が充実し、誰でもやりたいことをすることができる社会です。そこでは多様性が認められ、結婚を含めた心地よい人間関係を築くことができます。例えば、デザインフィクションで登場する大学生の理沙は、教員数に余裕がある無償の教育の下で好きな建築の勉強ができます。支援金が充実し、教育改革やダイバーシティ週間のイベントによって多様性を認める社会になっており、同じ学生のジョージと学生結婚し子育てする選択をした上で、それぞれの夢に向かうことができます。



Team Avoiding Relationship

Interview 1

北川 ひとみ
Hitomi Kitagawa
九州大学 法学部 4年

受講目的
受講目的は、課題解決能力を身に付けること、また専門分野である社会保障について、福祉国家フィンランドの視点を学ぶことです。課題解決能力は、特に柔軟なデザイン思考の仕方でアイデアを産み出すプロセス、そして課題解決の上での他の専門分野や国の人々と連携、という点を学びたいと考えました。

プロセスの課題
私たちのグループのテーマは、Avoiding Relationship（人間関係の回避）でした。そのためテーマ・原因も多岐にわたるため分析が難しかったです。また、文化的背景にも大きく左右されるため、アールト大学の学生との議論では思いもよらない多くの発見がありました。授業の過程で学んだ課題分析の仕方を使って掘り下げ、アールト大学の学生の考えをヒントに、根本的な課題に辿り着くことができたと思います。

プレゼンテーション後の感想
結婚やそのための出会いの場を増やすのがよい、という日本ならでわの考え方にとらわれていたことに気がつき、多様性を認めあうことができ、自分に自信をもってベストな関係性を築く社会を目指す、と課題を大きく設定し直せたことは講義やアールト大学の学生との交流、各施設の訪問がなければ、得ることができなかったアイデアだったと思います。今後も柔軟で視野広く課題の解決に携わりたいと思います。

Member

荒巻 朋奈 Tomona Aramaki
経済学部 2年

北川 ひとみ Hitomi Kitagawa
法学部 4年

岡田 紗季 Saki Okada
工学部 3年

石橋 温美 Atsumi Ishibashi
共創学部 1年

Viktoriya Korshunova
MA in New Media, Sound in New Media

提案

2 Tentopia

Team Difficulty of Finding Childcare

課題

私たちのグループでは、事前に福津市を訪れ未就園児を持つお母さん方に子育てで困っていることをインタビューしました。その時に最も多く上がった声が、待機児童に関するもので、インタビューに答えてくださったほとんど全てのお母さん方からご意見をいただきました。待機児童問題には多くの側面があります。日本では、保育施設が少ないことで入園の競争が高まり、中には役所の前に書類をもらうために朝の6時から並ぶお母さんもいるそうです。私たちは単に、こうした保育施設の不足による保護者の負担を解決するだけではなく、みんなが利用したいと思うような新しいタイプの保育施設を提案することを課題としました。

デザイアブル

今回の私たちの提案の骨格となるのは、保育施設の普及、そしてそれに伴う施設の絶対数の増加による待機児童の減少です。また、保護者の利用したくなる保育施設という観点から、フィンランドでの現地フィールドワークでの経験を元に、子供が自然と触れ合う機会を増やすという要素も包括しました。

ソサエタル・デザイン

Tentopiaでは、まず一人の専門家が一つのテントを運営しています。専門家は教師として子供たちに『釣り』や『料理』などのけいけんをさせてあげます。そして、他の複数のテントと連携して、一つのTentopiaとして稼働していきます。子供たちは保護者と一緒にどの科目を受けるのか、つまりどのテントに行くことにするのかというカリキュラムを決めます。カリキュラムによって子供たちは10〜15人のグループ分けられ、2人の保育士とともに専門家の運営するテントを行き来します。テントによっては、川の近くなどに設置することができ、通常の保育施設よりも新鮮な環境下で学ぶことができます。

日本のユートピア2040

待機児童問題が深刻化し、将来の日本には多くの保育施設が設立されています。そんな新しく設立されていく保育施設の一つの形として私たちはTentopiaを提案しています。Tentopiaの可動性によって、保育施設の不足は解消され待機児童を減らすことができます。また、保育士の「保育」の仕事と「教える」仕事を分化することで保育士の仕事を減らし彼らにとっても良い環境にすることができます。さらに、Tentopiaのカリキュラムによって子供たちは幼少期から多様な経験を積むことができ多くの刺激を得ることができると考えています。

Team Difficulty of Finding Childcare

Interview 2

石原 圭介
keisuke ishihara
九州大学 文学部 1年

受講目的

目的は大きく分けて二つありました。一つは英語を使って目的を持った議論をしたいと思ったことです。もう一つはフィンランドの福祉について学びたいと思ったからです。私は身近に障がいを持った人がいるという環境で育ってきたため日本の福祉問題などに興味を持つようになりました。現在の日本社会の中ではバリアフリー化やノーマライゼーションが叫ばれていますが、いまだに十分実現できているというレベルには達していないと感じていました。そこでこのプログラムに参加することで、フィンランドの充実した福祉を実際に感じて日本のそれと比べてどのような点が違うのかを考えてみたいと思い参加を決めました。

プロセスの課題

私たちのグループは The difficulty of finding childcare を解決するために何が必要かを考えました。議論を進めていくうちに、この問題を解決するには保育士の数の不足なども大きくかかわっており、さまざまな問題と複雑に絡んでいることがわかりました。しかしながら、一度にすべての問題を解決することは難しいため、まず一つの問題を解決しようと考え、保育施設の数不足に着目しました。日本では保育施設の設置に関しての規制が厳しいため容易に増設は図れないという状況にありました。そこで第一案として法改正による規制緩和を考えましたが、抽象的なアイデアにとどまってしまったため、第二案として、規制のことは考えずに、どのような形式の保育施設なら増設しやすいかを考え、移動テント式保育施設を考えました。

プレゼンテーション後の感想

私たちのグループが今回のプログラムで取り組んだ問題は、チャイルドケアを見つけることの難しさでした。フィンランドに行く前に考えていたアイデアとフィンランドに行って向こうの留学生と議論をして考えたアイデアが大きく異なっていたため、アイデアをうまくまとめて整理したり、深めたりすることに相当な時間を要しましたが、その長時間にわたる議論を重ねることで私たちのアイデアをより洗練されたものにすることができたと感じています。また、自分たちのグループのプレゼンテーションを通して今回私たちがフィンランドで学んできたことを見直すことができたとともに、ほかのグループのプレゼンテーションを通じて日本とフィンランドにおける福祉の違いなどを比べることができ、大きな経験になったと感じています。

Member

石原 圭介 keisuke ishihara
文学部 1年

早田 幸太郎 Koutarou Hayata
共創学部 1年

中田 裕太郎 Tanaka Yutarou
共創学部 1年

渋谷 美優 Miyuu Shibuya
共創学部 1年

青山 友海 Tomoka Aoyama
芸術工学部 4年

Ting-Jhen Yang
MA in Collaborative and Industrial Design

3 1000 HAPPY FATHERS DAY

課題

日本社会において、男性は残業などで帰りが遅くなり、家族と過ごす時間や子育てをする時間が不足しています。家族で過ごす時間の不足は夫婦間のコミュニケーション不足の問題や、子どもの成長に関わる問題（自尊心、学力など）にもつながっています。また、職場において、男性の子育て参加に対する理解が十分でないため、父親が子育てのための育休をとろうとする際に、父親自身が他の働いている同僚に対する罪悪感を覚えてしいがちです。また、上司が私的な感情からパタニティハラスメントをして育休取得を妨害したりすることもあります。さらに、育休を取得することができても、雇用や人事の問題から期間が終了した後に仕事に復帰するのが難しいのが現状です。このように男性が育児に参加しやすい環境、家族と過ごしやすい環境が整っていません。

デザイアブル

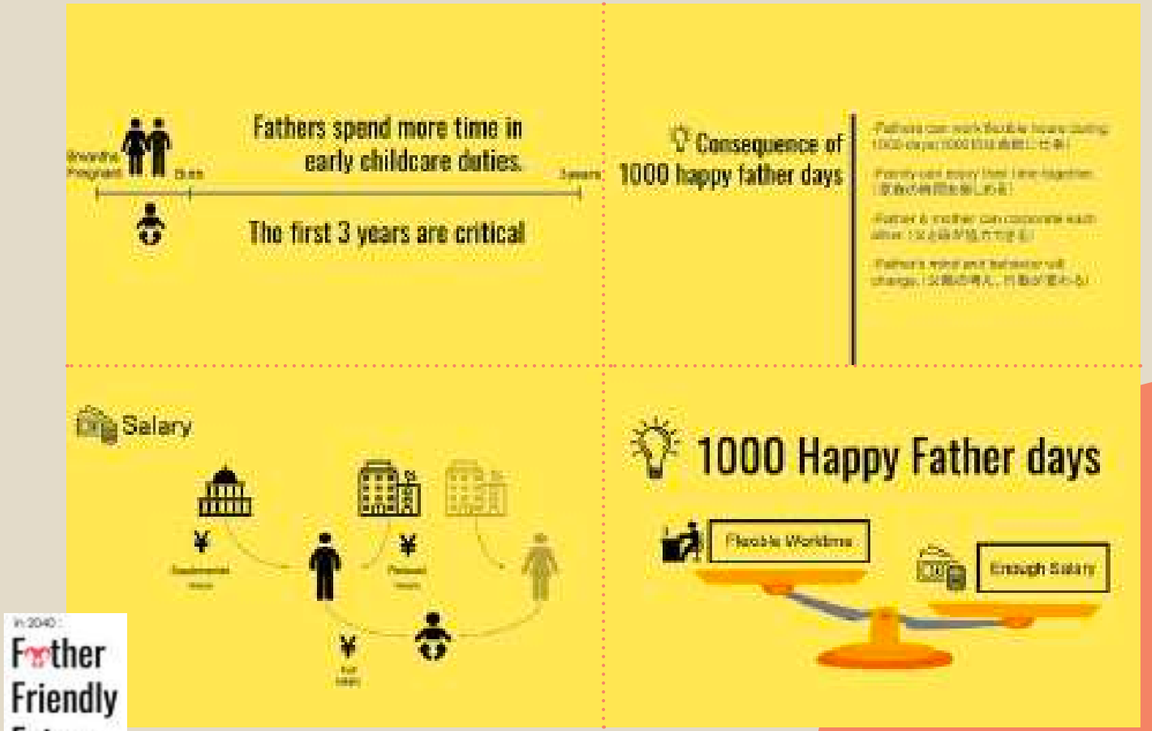
父親が残業などで時間を拘束されることなく、家族とすごしたりコミュニケーションをとったりする時間や、自分が好きに使うことができる時間を十分にもつことができ、父親にとっても母親にとっても、子どもにとってもハッピーな社会。また、すべての男性が、男性の子育て参加に対する理解がある社会。

ソサエタル・デザイン

妊娠８ヶ月から子どもの３歳の誕生日までの約1000日間、原則すべての父親の労働時間をフレキシブルにすることで家族とのコミュニケーションの時間、子育てに参加する十分な時間を取れるようにします。父親はこの約1000日間を通して、母親と十分なコミュニケーションをとったり、お互いの仕事の理解を深めたりするなど、家事や子どもとの関わり方を経験することができます。この経験が男性の子育て参加に対する意識の変化に繋がり、期間終了後も家族や子育てについて意識しながら過ごせるようになります。またこのデザインは育休と異なり、仕事を休む必要がないので、職場復帰に関する問題も解消されます。

日本のユートピア2040

すべての人々が子育てに理解を持ち、男性も女性も関係なく子育ての時間、家族と過ごす時間を十分にとることができる社会。家族（両親と子ども）にとって、子育ての期間がHappyな時間として思い出に残るような社会。すべての働く人に子育てについての理解があり、すべての両親が子育てをしたいと思うことができる社会。



In 2040 :
Father Friendly Future

Team Father's Role

Interview 3

山崎 慶人
Keito Yamazaki
九州大学 共創学部 1年

受講目的

私がこのグローバルPBLプログラムを受けようと思ったきっかけはいくつかあります。まず1つ目の理由は、海外に行くという体験をしたかったからです。私には将来海外で働きたいという目標があります。にもかかわらず、私はほとんど海外に行ったことがありませんでした。海外で働きたいと言ってはいるものの、海外がどんな感じなのか全く知らなかったので、どんなものか体験してみたいと思ったのが1つ目の理由です。2つ目の理由は自分の英語力を確かめたかったからです。僕は英語が好きだったのですが、あまり英語のコミュニケーションをしたことがなかったので、どのくらい使えるのか知ろうと思った、というのが2つ目の理由です。それに、今まで全く学んでこなかったような「デザイン」を学べるというのが非常に魅力的に感じたので、参加することにしました。

プロセスの課題

私たちの班は、"Father's Role" について考えました。日本には昔からずっと「男が働き女は家事」という固定観念があります。それが今も抜けきっていないせいか、今でも日本では父親は育児にほとんど参加せず、母親にまかせっきりという家庭が多いようです。父親は育児をしたいと思っていても、職場が育休をとらせてくれなかったり、そもそも育休制度が整っていなかったり、父親が育児に参加できるようになるまでに解決せねばならない問題はたくさんありました。そこで私たちは国からの育児支援がしっかりしているフィンランドの父親や育児施設を実際に現地で見て、日本との違いを考えてみたところ、やはり"mindset"の違いが大きいと感じました。日本をフィンランドのようにするには固定観念を変える必要があるので、簡単ではないですが、ちゃんとした育休のルールを定めることで、固定観念が変わるよう仕向けることはできると思いました。

プレゼンテーション後の感想

今回のグローバルPBLプログラムでは多くのことを知り、体験することができました。フィンランドと日本には様々な違いがあるということ。現地の留学生の方と一緒にソーシャルデザインを英語でするという体験。自分の英語もちゃんとわかってもらえるということ。みんなが得をするシステムを作るのは容易ではないこと。自分は長い時間英語を聞くことが得意ではないということ。このプログラムで自分の得意なことから苦手なことまで気が付くことができました。本当にグローバルPBLプログラムに参加してよかったと思っています。今回学んだことを今後の大学生活でも活かしたいです。

Member

山崎 慶人 Keito Yamazaki
共創学部 1年

粟田 武斗 Taketo Awata
共創学部 1年

藤瀬 涼花 Suzuka Fujise
共創学部 1年

田中 瑞帆 Mizuho Tanaka
共創学部 1年

Tito Williams II
MA in Collaborative and Industrial Design

提案

4 AS THEY WISH

Team Work and Small Children

課題

現在の日本では、育休制度はあるものの、職場の雰囲気から取得しづらい状況にあります。その原因の一つに、自分の抜けた穴を埋めるために人材が派遣されることが少なく、同僚に負担をかけてしまうことが挙げられます。しかし、そのための人材を見つけることは難しいのが現状です。派遣社員やフリーランスは自分の裁量で仕事ができる一方、仕事が取れるか分からない不安定さや、正社員に比べ少なくなりがちな収入など、不安もあります。また、新卒採用がメインでほぼ一発勝負な就活制度により、望む職種に就けず夢を諦めてしまう人もいます。生活のため、お金のために仕事をしている人は、自分の仕事にやりがいを感じにくい場合もあり、同僚が育児休暇をとる際、自分に降りかかる仕事の山が脳裏に浮かんで、命の誕生を純粋には喜べなくなっているのではないでしょうか。

デザイアブル

“Everyone can work as they wish.”仕事を続けながら子育てがしたい人も、子育てに集中したい人も、自分のペースで仕事がしたい人も、誰もが望む方法で働ける社会。自分が本当にしたい仕事ができ、自分の仕事に誇りを持つことができる社会。

ソサエタル・デザイン

高校卒業後、私たちは①フルタイムで働く、②フリーランスで働く、③勉強を続ける、という選択肢を得ます。①フルタイムの場合、安定して働けて昇進の機会もあります。育休の際は政府から毎月給料と同じ額を支給されます。②③の場合、ベーシックインカムが毎月支給されます。②のフリーランサーは給料の1/3を政府から、2/3を企業から受け取ります。仕事の有無にかかわらずベーシックインカムを得るため、月によっては多くの収入を得られます。③の勉強を続けるは、勉強を続けたい人はもちろん、①のフルタイムで希望の職種に就けなかった人が、勉強しなおして何度でも挑戦することができます。彼らはフリーランスで希望の職種につくチャンスがあります。

日本のユートピア2040

“Everyone can work as they wish.”それが私たちのユートピアです。2040年、日本ではフリーランサーが増加し、育休による欠員を補えるようになりました。同僚に負担をかける心配はなく、企業もフリーランサーを雇うことで経費削減になるため、当たり前に育休を取ることができます。フリーランサーは安心してよい収入を得ながら臨機応変に働くことができ、学生は家庭の収入の如何にかかわらず勉強を続けることができます。希望の職種につく機会が何度も与えられ、多くの人が自分の仕事に誇りを持って、新しい命の誕生を心から祝福できる社会になりました。

Team Work and Small Children

Interview 4

墨田 知世
Tomoyo Sumida
九州大学 芸術工学部 2年

受講目的

入学前からこの授業を知り、苦手だった英語でのディスカッションを1年間勉強して、2年生になった今年受講しました。この授業に惹かれた理由は3つあります。モノのデザインだけではなく、仕組みのデザインに興味をもったこと。ロシアとスウェーデンという強国に挟まれた、陸続きの国フィンランドの文化や人々の考え方に純粋に触れてみたかったこと。1年前のこのプログラムよりも長くフィンランドに滞在できるようになったことで、アールト大学の学生やネウボラの看護師さん、保育園・デイケアの先生と直接触れ合う機会ができたこと。(自分一人で訪れるだけでは決してできない経験だと思います。)上記より、自分がこの先デザインに携わっていくうえで学びたいことが学べると考え、受講しました。

プロセスの課題

はじめは、6人組(先輩男女2人、後輩男女4人)を作り、家族のようなチームとして共に働くプロジェクトを考えていました。例えば後輩が1人育休で休んだら、他の5人でその分を補って、代わりにその後輩のお給料の2/3を特別手当として分配するというシステムです。後輩はメンバーに支えられて復帰し、自分が先輩となってまた後輩を支えるという、いい循環になると捉えていました。しかしインタビューを通して、理想は育休で空いた穴にきちんと人が派遣されることだと気が付きました。ここで壁にぶつかりました。なぜなら、次に考えた「フリーランサーを増やして育休でできた穴を埋める」という案だけでは、2017年度のヤンソン計画(Social Business Idea Contestグランプリ受賞)の下位互換でしかなかったからです。

プレゼンテーション後の感想

この授業を通して、多くの人がやりがいではなく、お金を得るために働いているという現実にぶつかりました。夢を叶えて自分が本当にしたい仕事ができている人はほんの一握りで、皆どこかで何かを諦めて生きているのだと感じました。大学入試は、浪人という選択肢もありますが、就職活動ではほとんどの人は第一志望でなくても諦めて入社します。どんなに制度を整えても、自分に余裕がないと人を思いやることはできません。私は仕事と子育てがしやすい環境をつくるために、まずは全員が自分の仕事に誇りを持って働ける社会にしたいと考えました。最終発表は完璧には程遠いものでしたが、今までずっと考えてきたものを途中で変えること、1から始めることを恐れず何度も始めからやり直したことが、私たちの強さだったと思います。「結果がすべてだ」と、19年間信じ続けてきた私にとって、この経験が1番の成長でした。チームのメンバーに心から感謝しています。

Member

単 玉潔 Shan Yujie
芸術工学部 4年

墨田 知世 Tomoyo Sumida
芸術工学部 2年

宮崎 泰地 Taichi Miyazaki
共創学部 1年

有田 瞳子 Touko Arita
共創学部 1年

Apichaya Sindhuprama
MSc in Creative Sustainability, Real Estate

5 Internship Supported by Government

課題

日本では育児休暇や産休の制度が既に存在しており、今日に至るまで様々な改良が行われてきました。しかし、働きたい女性にとっては、休みを取ることに対する抵抗があります。理由としては、本人の問題と社会の問題の2つが考えられます。本人の問題としては、ある程度キャリアが出来てしまうと、仕事に対する責任感を感じてしまい、「他の人に迷惑をかけてしまうのではないか」、「この仕事は自分にしか出来ない」などの思いを持つようになり、中々産休で休むとは言いづらくなります。社会の問題としては、産休や育休で休むと代わりに働く人が必要になることや休暇中の給料が減額されてしまうなどがあります。このような観点から、現在の日本では子どもを持つことを先延ばしにしたり、妊娠により仕事を辞めてしまうなどの問題があります。

デザイアブル

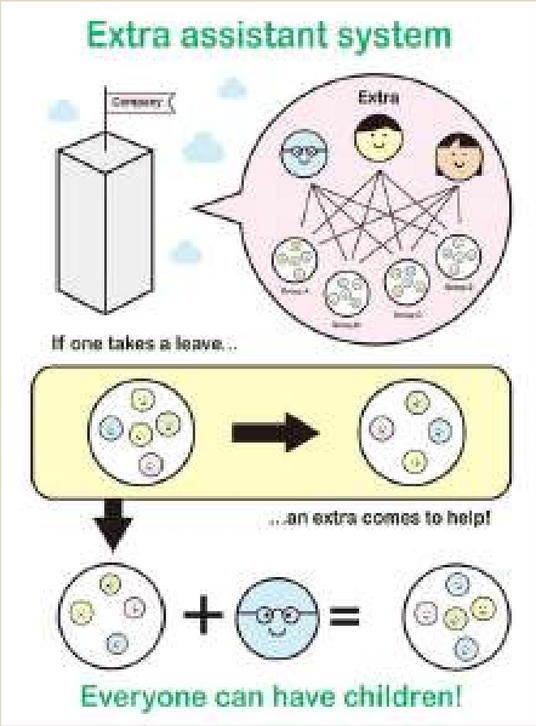
働く女性が、子どもが欲しいと思い、妊活、出産、育児に専念したい時に、会社や一緒に働くメンバーに迷惑をかけずに、気軽に休みを取れるような社会的な仕組みがあり、子どもを好きな時に産むことが出来る社会。

ソサエタル・デザイン

働く女性が妊娠や育児で休みを取りたい時に、一時的に女性の代わりとして働く人を派遣するシステムを作ります。このシステムは、政府が働きたい人の情報を登録し、休みを取りたい人の申請があった会社に派遣する仕組みです。民間が運営する派遣システムでは、派遣会社に対して通常の給料と合わせて紹介料を払う必要があり、会社にとっては大きなコストになってしまいます。そのため、会社の経営にとっては、あまり休みを取ってもらいたくないと考えるようになり、妊娠を望む女性の採用が進みません。新しいシステムを導入することにより、紹介料を払わず、休みを取った人の代わりを探すことが出来ます。

日本のユートピア2040

2040年の日本は、誰でも子どもを産むことが出来るようになります。働きたい女性、専業主婦になりたい女性、一時的な休みが欲しい女性、子育てしながら働きたい女性。このような多様な選択を自由に選択することが出来るようになります。会社も、簡単に代わりの人を見つけてくることが出来るようになり、産休や育休を取ることが当たり前の社会になります。日本に住む人の妊活・産休・育休に対するイメージも変わり、休みを取ることが社会貢献になります。2040年の日本ではこれが普通になります。



Team Maternity Ecosystem

Interview 5

横松 和
Kokoro Yokomatsu
九州大学 共創学部 1年

受講目的

私は共創学部に所属しており、日々身の回りにある問題を考えていました。これまで、社会の問題を机上で考えることはありましたが、実際に現地へ赴いたり、それに直面する方のお話を聞くことはありませんでした。そんな時に今回のグローバルPBLプログラムを知り、自らをレベルアップできるチャンスだと思い、受講を決めました。また、フィールドワーク先がフィンランドということも理由の一つとなったと思います。以前から、社会福祉が充実していたことを知っていましたが、実際に目にすることができると知って、さらに受講への意欲がわきました。

プロセスの課題

フィンランドの社会福祉システムは本当に素晴らしかったです。しかし、だからといって、日本が劣っているわけではありません。両国ともに現在の状況に至るまでのプロセスがあったわけで、フィンランドのこのシステムがとても素晴らしいものであるから、日本に採用すべきだといっても、難しいところがあります。それぞれのバックグラウンドを考えると、問題の要因は一つだけではなくて、複雑に絡み合っていることが分かり、その点ではとても苦労しました。お金の問題はもちろんですが、国民性やそれぞれの社会的地位、今の国の状況など考えれば考えるほど、複雑な要因がありました。また、すべての人が幸せになれることを考えると相当難しい問題だと思いました。

プレゼンテーション後の感想

帰国してからの最終プレゼンでは、福津市の副市長をはじめとするたくさんのお客様がいらっしゃいました。フィンランドの研修を通して、たくさんのことを考えましたが、チーム内で話し合うことが多く、独りよがりな考えになっていないか、初めてこのアイデアを聞いた人は一体どんなことを考えるだろうか、本当に受け入れてもらえるか、など発表前まで不安要素は尽きませんでした。しかし、フィードバックでは質問だけでなく、良かったところなどを言ってくださる方もいらっしゃって、今までやってきて本当に良かったなと思いました。決して、楽なプログラムではないですが、とても充実していました。考えが独りよがりだったり、脱線したりしないように先生方も細かくアドバイスやご指導をしてくれました。多少の迷いもありましたが、思い切って受講してよかったです。

Member

大澤 啓介 Keisuke Osawa
医療系学府修士 2年

横松 和 Kokoro Yokomatsu
共創学部 1年

阿部 倫 Michi Abe
芸術工学部 2年

森 春奈 Haruna Mori
文学部 1年

Antton Nuotio
MA in New Media, New Media Design and Production

Interaction in Finland

フィンランドでの交流

Redesign of Society vol.5

担当教員

九州大学 ロバート・ファン／
アントレプレナーシップ・センター（QREC）特任助教
山田 裕美

九州大学 大学院 芸術工学研究院
デザインストラテジー部門 教授
平井 康之

元アールト大学 メディアラボ
Arkiリサーチグループ ディレクター
カリ・ハンス・コッモネン

協力（敬称略）

Philip Dean
Aalto ARTS, Department of Media, Media Lab

Michihito Mizutani
Siili Solutions

Johanna Lammi-Taskula
THL

Yuhsuke Koyama
Shibaura Institute of Technology

Minna Eväsoja
Tapiola Neuvola

Mervi Pasanen
Silkkiniitty Day Care Centre

Hanna Talola
Toppelund Primary School

Matias Kommonen
Iso Omena Library

Vilma, Régis and Eino Frias

多摩美術大学
Tokyo Graphic Recorder
清水 淳子

ブックレット監修

平井 康之
山田 裕美
稲村 徳州

デザイン

助太刀デザイン
小林 大助

（表紙イラスト）
小林 芽生

九州大学スタッフ

九州大学 ロバート・ファン/
アントレプレナーシップ・センター
（QREC）テクニカルスタッフ
中原 麻里子

出版日：2019年3月
発行：九州大学

本事業は「次世代アントレプレナー育成事業（EDGE－NEXTプログラム）文部科学省」の助成を受けたものです。